

令和元年度 第98回全国高等学校サッカー選手権大会埼玉県大会 総評

「昌平高校2年ぶり3回目の栄冠」

報告者：高体連技術委員 朝霞西高校 山下 暁之

令和元年度第98回全国高等学校サッカー選手権大会埼玉県大会が8月18日から11月17日の期間に開催された（一次予選8月18日～8月25日、二次予選トーナメント10月14日～11月17日）。二次予選トーナメントは、U18埼玉県リーグS1・S2に所属している23校（Bチームの7チームは除く）と総体県予選でベスト8の成績を残した埼玉栄高校、細田学園高校、そして一次予選を勝ち上がってきた27校の計52校によるトーナメント方式で実施された。優勝は昌平高校、準優勝に西武台高校、3位に聖望学園高校と国際学院高校という結果となった。昌平高校は2年ぶり3度目の優勝で、令和初の全国高校サッカー選手権大会への切符をつかんだ。

優勝した昌平高校は、インターハイで正智深谷高校に2回戦で敗れたため今大会は1回戦からの出場となった。進修館、浦和南、武南、正智深谷、聖望学園、西武台といった強豪を次々と破り栄光を勝ち取った。決勝戦に駒を進めるまで厳しく緊張感のある戦いを経験していく中で、選手たちがより一層たくましく成長し、チームとしての成熟度や完成度が高まっていった。

攻撃においては、チーム全体でボールを丁寧に動かしながら前線の選手が流動的かつ連動した動きでボールを引き出し、複数の選手が関わりながら中央やサイドを崩し、多彩な攻撃を展開した。1トップを務めた⑩小見が鋭い動き出しで常に背後を狙い何度も相手ゴールを脅かした。⑩須藤、⑦紫藤、⑧鎌田は高いスキルと巧みなドリブルで昌平の攻撃を牽引した。⑥柴、⑭小川がセカンドボールを回収し、何度も2次攻撃につなげ、厚みのある攻撃を繰り返し展開した。攻撃陣にタレントが多いため攻撃に目がいきがちだが今年の特徴すべき点は攻撃から守備の切り替えの速さ。即座にボールを奪い返して、攻撃につなげている場面が多く見られた。

守備においては、DFラインを高くコンパクトなラインを設定し、コレクティブな守備で相手に主導権を握らせないゲームが多かった。このことは6試合で失点1というデータからも読み取れることができる。

新人戦では圧倒的な強さで優勝を飾ったが、関東予選では3回戦で埼玉栄に2-3で敗退、高校総体予選では2回戦で正智深谷0-3で敗退。守備面での課題が改善された部分が見られ、それにより攻撃の爆発力が光った。見事な仕上がりで今大会の優勝を飾った。

準優勝した西武台高校は高校総体の優勝し、全国大会を経験したなかで、全員がハードワークし、攻撃の質、守備の質にこだわるサッカーで攻守において安定した強さで決勝まで勝ち上がってきた。

3位は国際学院高校と聖望学園高校。国際学院高校は前線からの守備の強度が非常に高く、相手陣地の高い位置でボールを奪い、個の質が高い前線の選手がしっかり得点を決め、

勝ち上がってきた。

聖望学園高校はDFラインからGKを含みながらチーム全体で丁寧にボールをつなぎながらビルドアップしていくスタイルで勝ち上がってきた。

ベスト8に残った西武文理は相手の特徴を消し、チーム全体で献身的な守備をして勝ち上がってきた。埼玉栄は特徴のある選手が多く攻撃の破壊力が光っていた。細田学園は初のベスト8だったが選手一人一人の能力が高いうえにチームでの攻撃、チームでの守備がしっかり構築されていた。正智深谷はチーム全体のレベルが高く攻守ともに完成度が高かった。

大会全般を振り返ると、特徴のあるチームが勝ち上がってきた大会だったと言える。そのなかに「自分たちのスタイルや戦い方を貫き通して戦うチーム」や「相手チームのストロングポイントを消すために意図的に戦い方を変えるチーム」、があった。各チームが自分たちの特徴を理解し、そのうえで“勝つこと”から逆算した戦い方や戦術などをしっかりプランニングして戦ったことで、多くの好勝負が見られた大会となった。

最後に、昌平高校には本大会までの限られた時間の中で最高の準備をし、チームの完成度をさらに高め、全国の舞台で好成績を残すことを期待し結びとする。